

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

Effect of Out-of-Class English Learning on Development of Autonomous Learners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡裏, 佳幸, 土屋, 麻衣子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/11478/00001718

英語授業外学修による自律的学習者の育成

岡 裏 佳 幸 (教養力育成センター)

土 屋 麻衣子 (教養力育成センター)

Effect of Out-of-Class English Learning on Development of Autonomous Learners

Yoshiyuki Okaura (Center for Liberal Arts)

Maiko Tsuchiya (Center for Liberal Arts)

Abstract

This paper demonstrates that out-of-class English learning is one of the effective pedagogies for developing autonomous learners. The out-of-class English learning is designed for all the students who enroll in English A and English B in 2021 academic year to acquire English reading skills through the CEFR-J based textbook, and it also employs planned scaffolding for learners to foster the degree of understanding and acquisition of grammatical, syntactic, and lexical knowledge, so that they can be autonomous English learners. The quantitative survey reveals that the out-of-class English learning shows statistically significant difference in learners' attitude and motivation.

Key words: *Out-of-Class English Learning, Autonomous Learners, Motivation, CEFR-J, Planned Scaffolding*

1. はじめに

本稿の目的は、English A・Bの全履修者を対象とした授業外学修が自律的学習者の育成に有効であることを明らかにすることである。まず、第2節では、近年の日本の英語教育の評価枠組として注目を集めているCEFR (*The Common European Framework of Reference for Language*)とCEFR-Jを概観しておく。次に、第3節では、英語授業外学修の共通教材と解説動画の概要を説明する。さらに、第4節では、英語授業外学修において採用した計画型足場かけ (*planned scaffolding*)と、自律的学習者 (*autonomous learners*)の育成について言及する。第5節では、t検定 (*t-test*)を用いた量的研究 (*quantitative research*)により、英語学習者の取り組み姿勢 (*attitude*)、意欲 (*motivation*)、英語学習のニーズを分析する。第6節は今後の展望である。

2. CEFRとCEFR-J

近年、日本の英語教育において、CEFRが共通の学習・教育・評価のための枠組としての地位を確立しつつある。2018年6月15日に閣議決定された第3期教育振興基本計画では、「目指すべき方向性、指標」としてCEFRに言及している。

本学の英語教育においても、現行カリキュラムの到達目標として、CEFR-Jを採用している。また、2021年度よりプレイスメントテスト、アチーブメントテストとして新たに導入した、英語CAN-DOテスト (Z会ソリューションズ)は、CEFR-J準拠で開発されたテストである。さらに、同年度より教育研究改善取組の一環として実施している、英語授業外学修においても、CEFR-J準拠の*Reading Express Book 1* (Z会出版)を共通教材として採用している。

ここで、CEFRとCEFR-Jを概観しておく。2001年、欧州評議会 (*The Council of Europe*)が、言語共通の枠組としてヨーロッパ言語共通参照枠 (*The*

Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, and assessment : 以下, CEFR) を発表した (Trim 2012)。その中心概念は行動指向アプローチ (Action-oriented Approach) であるため, 言語学習者の能力は, 「何ができるか」, 「何ができないか」によって測定される。すなわち, レベル別に設定された CAN-DO ディスクリプタによって, 言語学習者の能力が測定されるのである。

日本の英語教育の到達目標を明確に示すことを目的として, CEFR に着目したのが, いわゆる小池科研, 投野科研である。2004 年以降, 投野氏を中心とした研究グループが, CEFR に関する大規模調査を実施することによって, 日本人英語学習者の実態により即した CEFR-J を開発した。具体的には, A1 レベルと A2 レベルを細分化するとともに, Pre-A1 レベルを設定することによって, 合計 12 のレベル (Pre-A.1, A1.1, A1.2, A1.3, A2.1, A2.2, B1.1, B1.2, B2.1, B2.2, C1, C2) に分類し, レベルごとに, 「理解 (聞くこと, 読むこと)」, 「話すこと (やりとり, 発表)」, 「書くこと」の各領域において, 「何ができるか」を明示している点が, CEFR-J の特徴である。

3. 英語授業外学修の概要

3.1. 教材

第 3 期教育振興基本計画において, 「今後 5 年間の教育施策の目指すべき方向性に対する指標の考え方 (例)」として, 「英語力について, 中学校卒業段階で CEFR の A1 レベル相当 (英検 3 級等) 以上, 高等学校卒業段階で CEFR の A2 レベル相当 (英検準 2 級等) 以上を達成した中高生の割合を 50% にする」ことを, 目標候補案として挙げている。しかしながら, 実際には, 日本人英語学習者の約 80% が CEFR の A2 レベル以下に属している。また, 本学に入学する学生の約 60% が英語入試を受験していないため, 受験勉強を通して修得されるべき基本的な語彙や文法の知識が不足している可能性が高い。現状を鑑みると, 語彙, 文法

の基礎を補うことが必要不可欠である。

英語授業外学修の教材として, *Reading Express Book 1* (以下, RE1) を採用することとした。RE1 は, 大学受験を視野に入れた英文読解教材であり, 基本的な語彙や文法の知識を修得するのに最適である。25 の英文と設問で構成され, CEFR-J の A1.2 レベルから A2.2 レベルまで段階的に学習できる構成になっている。また, 速読ストラテジーとして, センスグループ・リーディング (sense-group reading) を採用している。センスグループ・リーディングは, 同時通訳 (simultaneous interpretation) にも応用されている技法のひとつである。センスグループ・リーディングを修得すれば, リーディングのみならず, リスニング, スピーキング, ライティングにも応用することができる。英語の 4 技能に関わる, 極めて重要な技法である。

学習者は, 毎週指定された英文を読み, 設問に解答する。制限時間は 10 分である。

3.2. 解説動画の構成

英語授業外学修において重要な役割を果たすのが, 解説動画である。学習者は, 英文を読み, 設問に解答した後, myFIT の Stream にアップロードされた解説動画を視聴することによって, 英文の内容と設問の解法を確認する。

質保証の観点から, 1 名の専任英語教員が 25 回分すべての解説動画を作成することとした。各回の解説動画は, 概ね 35 分～50 分で, 語彙 (vocabulary), 文法 (grammar), 文構造 (sentence structure) の解説を中心に, 設問の解法を明示した。さらに, 英文に関連のある背景知識 (background knowledge) についても説明を加えることによって, 機械的学習 (rote learning) に陥ることなく, 意味学習 (meaningful learning) となるよう配慮した。

4. 計画型足場かけと自律的学習者の育成

英語授業外学習を通じて, 自律的学習者を育成するためには, 内発的動機付け (intrinsic motivation) と計画的足場かけが有効であると考えた。

まず、1年次科目である English A・B の成績評価において、10%を授業外学修に充てることにした。成績評価という外発的動機付け (extrinsic motivation) により、学習を開始することになるが、本取組の最大の目的は、英語学習を継続することのできる自律的学習者を育成することである。それゆえ、学習者の興味や関心を喚起したり、「驚き」や「発見」などにより知的好奇心を刺激したり、例題などを通して部分的に成就感を味わわせ、成功への期待感を抱かせたりすることによって、内発的動機付けを高めることが、自律的学習者を育成するために必要不可欠である (望月 2018)。

次に、Vygotsky (1978) によって発展した社会文化理論 (Sociocultural Theory) では、学習を学習者が社会文化的活動に参加する場 (participation) ととらえ、教員やより高いレベルの学習者の支援を受けて、学習者が一人では達成できないレベルに到達することを促すことができると考える (鈴木 2017)。一般的には、学習者が自らの力で問題解決するために与えられる、教員やより高いレベルの学習者による支援を、足場かけ (scaffolding) という (Swain, Kinnear, & Steinman 2015)。Gibbons (2002) は、より厳密に、足場かけを定義している。すなわち、学習者が新しいスキルや新しい概念、あるいは理解度を発展させるのを手助けするための特別な支援と定義している。

英語授業外学修においては、内発的動機付けを高めるための教授法として、計画型足場かけを採用した。Johnson (2019) は、教員がどのテキストを使用するのか、どのような補助的資料を提示するのかを、授業前に決定することによって、学習者の理解度を高めるために行う支援を、計画型足場かけと考えている。また、計画型足場かけには、語彙を事前指導するための視覚教材 (visuals) や実物教材 (realia) の使用等が含まれると主張している。さらに、Kayi-Aydar (2018) は、語の意味を推論する足場かけとしてのコンテキストの手がかり (context clues)、語の意味を理解する足場かけとしての視覚補助 (visual aids)、新しい語を思い

ついたり使用したりする足場かけとしての語の繰り返し (recycling) の教育的効果を実証している。Kayi-Aydar の主張は、文法事項についても当てはまる。すなわち、用法を推論する計画型足場かけとしてのコンテキストの手がかり、用法を理解する計画的足場かけとしての視覚補助、新しい用法を特定したり使用したりする計画的足場かけとしての用法の繰り返し学習には、教育的効果があり、自律的学習者を育成する上で、有効な手段であると考えられる。

英語授業外学修における、計画型足場かけの具体例を挙げておく。図 1.1 では、名詞が 2 つ並んだ例を含む英文を解説する際、英文中での用法に加えて、他の用法についても言及している。関連のある用法を同時にインプットすることによって、今後同様の例を含む英文に触れた際に、2 用法のいずれであるかを推論することが可能となる。

He opened Pietro's, the second pizza restaurant in the country.
 open
 ...を開業する、開店する

★名詞が2つ並んだ場合

(a) 名詞1 名詞2
 pizza restaurant
 →名詞1が名詞2を修飾する (名詞1が形容詞のように働く)

(b) 名詞1 名詞2
 または
 名詞1, 名詞2
 Pietro's, the second pizza restaurant in the country
 →名詞1と名詞2が同じもの

図 1.1 第 1 回授業外学修：名詞が 2 つ並んだ例

図 1.2 では、既習の「名詞が 2 つ並んだ例」を含む英文を解説している。図 1.1 と同様の例であることを視覚的に理解できるように、スライドを作成した。音声解説では、既習事項であることに言及することによって、理解度を高め、知識を定着させることができる。一方、十分に理解できていない学習者にとっては、再度学習することによって、知識の定着を図ることが可能となる。同一の文法事項を繰り返し学習することによって、同様の文法事項に直面した際、いずれの用法であるかを特定するための足場かけとなり、自律的学習を

促すきっかけとなる。

Welcome to ...へようこそ

Happy Jack's **Burger Shack**, / **home** of the famous Mega Bacon Burger! //

バーガーショップ ...の本場、本家
名詞1 名詞2

All of our burgers are **grilled** perfectly. //

(焼き網で) 申し分なく、完璧に
焼く、炙る

<If you're not **happy**>, / you can **ask for a full refund**. //

満足して ...を要求する 全額返金

be happy with ...
=be satisfied with ...
...に満足して

図 1.2 第 3 回授業外学修：名詞が 2 つ並んだ例

図 1.3 は、関係代名詞 that, which を用いた後置修飾の例である。矢印と括弧を使用するだけでなく、特に関係代名詞の用法についての説明を追加することによって、英文の構造を視覚的に理解する足場かけとなる。

I like to make short movies **with** my friends.

...と一緒に

I use a **simple, cheap** video camera (my dad gave to me **as a gift**).

簡素な 安価な ...として
= that my dad gave to me as a gift
関係代名詞that [which]の省略
that の先行詞はa simple, cheap video camera

The first thing (I do) is [find some of my friends (to be **actors**)].

= that I do
関係代名詞thatの省略
that の先行詞はThe first thing

図 1.3 第 7 回授業外学修：関係代名詞 that, which

さらに発展的な例が、図 1.4 である。関係代名詞 what を説明する際、既習の関係代名詞 that, which と関連づけることによって、繰り返し学習の効果を得ることができる。

Sometimes my brothers want to **be in the movie**, too.

映画に出演する

Then we **write down** [what happens] and [what everyone will say].

...を書き留める

★関係代名詞what
関係代名詞what は、先行詞the thing(s) + 関係代名詞that [which] の働きを持つ

what happens → the thing (that happens)
こと 起こる

what everyone will say → the thing (that everyone will say)
こと みんなが言う

図 1.4 第 7 回授業外学修：関係代名詞 what

次に、図 1.5 は、バーガーショップのメニューである。今後直面するであろう実際の言語使用の場面を想定し、自律的に学習できるように、関連表現を追加するだけでなく、発音のコツについても解説した。

Burgers	Drinks
Original Hamburger: \$7.99	Water: free
Mega Bacon Burger: \$9.99	Small soft drink: \$1.99
	Large soft drink: \$2.99
Sides	Combos (with burger)
Small Salad: \$1.99	Small soft drink and Fries: +\$2.99
Large Salad: \$2.99	Large soft drink and Fries: +\$3.99
burger = hamburger ハンバーガー	
salad サラダ	
combo セットメニュー	
fries ポテトフライ = French fries	
[さまざまなトッピング]	
Cheese, Cheddar Cheese, Cucumber, Ketchup.	(発音) = catchup
Lettuce, Mushrooms, Mustard, Onion, Sliced Pickle, Tomato	

図 1.5 第 3 回授業外学修：メニューとトッピング

図 1.6 は、筆者が撮影した画像を「実物教材」として使用し、解説を追加することによって、理解度を高めるための足場かけとした。また、「実物教材」の使用は、内発的動機付けを高めるための有効な手段である。



図 1.6 第 3 回授業外学修：burger with fries

さらに、図 1.7 では、burger with fries の関連表現として、poutine の画像（筆者撮影）を「実物教材」として採り上げている。これが、視覚的理解度を高める足場かけとして機能している。



図 1.7 第 3 回授業外学修：poutine

5. 学習状況

5.1. アンケート実施

本取組に際して、前期開始時と後期終了時に英語学習への取り組み姿勢や意欲等を捕捉するアンケートと英語学習へのニーズを把握するアンケートを実施した。前者の質問項目は以下の 6 項目である。

- 1) 受講英語科目に関する授業外学修を積極的に行ってきた。
- 2) 受講科目に関するもの以外に自分なりに英語学習を行ってきた。
- 3) 将来に向けて英語力を高めたいと考えている。
- 4) あとで後悔しないよう英語学習に励んできた。
- 5) 授業でよい成績をとるために英語学習をして

きた。

- 6) 頑張れば自分の英語力は伸びると思っている。

質問 1) と 2) は英語学習への取り組み状況、3)～5) は動機 (motivation)、6) は自己効力感 (self-efficacy) を捉えるものであった。回答は「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の 5 段階スケールとした。

分析においては双方のアンケートに回答した 468 名分を使用し、対応のあるサンプルの t 検定 (paired-samples t-tests) を行った (Dörnyei 2007)。また、英語学習のニーズ把握として、「どのような分野の英語を学習したいですか」という質問を置き、1) 大学院受験を含む専門的内容、2) TOEIC 等資格試験、3) 日常英会話、4) その他の中から 2 つまで選択してもらった。myFIT を通して回答への呼びかけを行った結果、前期は 612 名、後期は 485 名から回答を得た。

5.2. アンケート結果と考察

英語学習への取り組み姿勢や意欲等を捕捉するアンケートにおいては、表 1 が示すように、質問 3 以外のすべてにおいて後期の数値が上昇した。質問 1)、2)、5) においては統計的に有意な差 (statistically significant difference) が確認された。質問 1) の結果から、授業外学修として共通教材を設定したことによって、やるべきことへの意識づけがなされたことが窺える。また、質問 2) は受講科目の学習以外に主体的な学習をする者が増えたことを示している。動機については、質問 5) においては伸長が見られたが、将来を見据えた英語学習の部分 (質問 3、4) では有意差が見いだされなかった。今後は、実社会に出てからの有効性を具体的にイメージできるような教育的働きかけが、より必要であると考えられる。

表 1 前期および後期アンケート結果

	前期		後期		t (467)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
質問 1	3.07	0.98	4.39	0.85	-22.09**
質問 2	2.83	1.08	3.18	1.13	-4.74**
質問 3	3.91	0.90	3.86	0.91	.75
質問 4	3.80	0.95	3.90	0.89	-1.45
質問 5	3.53	0.90	3.77	0.89	-4.24**
質問 6	3.27	1.05	3.32	1.09	-.69

** $p < .01$

一方、英語学習へのニーズ把握のアンケート結果によると（図 2.1, 2.2），前期開始時に半数以上が「日常英会話を学習したい」を選んでしたが，年次終了時にはその割合が減少し，TOEIC などの資格取得に関する学習を望む者の割合が増えた。大学院受験を含む専門的内容の学習を望む者も微増した。年間を通した英語授業や専門科目の授業，学内のポスター等により，TOEIC という言葉を高校時よりも頻繁に見聞きする機会が増えたことで，就職活動における資格保持の優位性を意識する学生が増えたと推測される。しかしながら上述したように，実際に資格取得を狙った学習に取り組むかどうかという意欲の面での変化は小さく，認識している理想を実現するための実際の行動が伴っていない状況が窺える。この点を踏まえると，内発的動機付けのためには，授業ではいわゆる英語に関する知識を教えたり，リスニングやスピーキングなどの個別のスキル向上を狙ったタスクを行わせたりするほかに，上位年次における専門教育での英語の必要性や今後の社会生活や人生においての有効性や実用性を認識させる教育的工夫が今以上に欠かせないと考える。

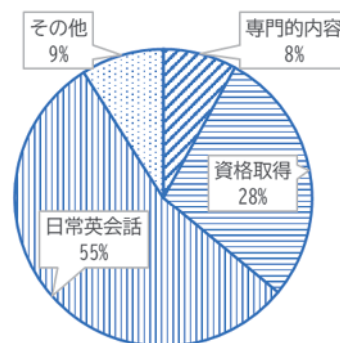


図 2.1 年次開始時の英語学習へのニーズ

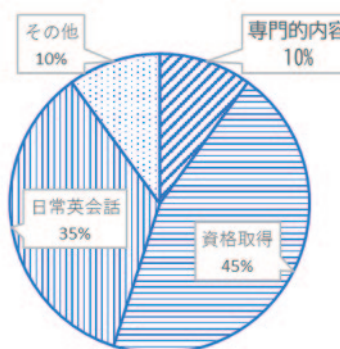


図 2.2 年次終了時の英語学習へのニーズ

6. 今後の展望

2021 年度より English A・B の全履修者を対象に実施した英語授業外学修において，内発的動機付けと計画型足場かけに着目し，自律的学習者の育成を目指した。アンケートの分析結果から，一定の効果が認められたと結論づけることができる。

2022 年度より，2 年次科目である English C・D の履修者全員を対象に，より高いレベルの *Reading Express Book 2* を共通教材とした英語授業外学修を実施している。今後は，2 年間英語授業外学修を継続した結果を分析し，さらに高いレベルでの継続学習への接続を検討する必要があると考えている。

参考文献

- 1) Gibbons, P. 2002. *Scaffolding Language, scaffolding Learning: Teaching Second Language Learners in the Mainstream Classroom*, Heinemann.

- 2) Johnson, E.M. (2019). Exemplary Reading Teachers' Use of Instructional Scaffolds with Emergent Bilinguals: How Knowledge and Context Shape their Choices. *tesol QUARTERLY VOLUME 53, NUMBER 1*, 108-132.
- 3) Kayi-Aydar, H. (2018). Scaffolding Vocabulary Development. In *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching, Volume V, Teaching Grammar & Teaching Vocabulary*, edited by Lontas, J. I., 3085-3090, Wiley Blackwell.
- 4) Lightbown, P. M. (2014). *Focus on Content-based Language Teaching*. Oxford University Press.
- 5) Mercado, L.A., (2015). Integrating Classroom Learning and Autonomous Learning. In *Language Learning beyond the Classroom*, edited by Nunan, D., & Richards, J.C., Routledge, 190-201.
- 6) Swain, M., Kinnear, P., and Steinman, L. (2015). *Sociocultural Theory in Second Language Education: An Introduction through Narratives (2nd Edition)*, Multilingual Matters.
- 7) Trim, J.L.M. 2012 "A Case Study of Cultural Politics and Educational Influences", in *The Common European Framework of Reference: The Globalisation of Language Education Policy*, edited by Byram M and Parmenter L., 2012pp. 14-36, Multilingual Matters.
- 8) Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes*, Harvard University Press.
- 9) Dörnyei, Z. (2007). *Research Methods in Applied Linguistics*. Oxford University Press.
- 10) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁。(2010).『詳説 第二言語習得研究：理論から研究法まで』。研究社。
- 11) 鈴木渉(編)(2017).『実践例で学ぶ第二言語修得研究に基づく英語指導』。大修館書店。
- 12) 投野由紀夫(編著)(2013).『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』。大修館書店。
- 13) 投野由紀夫・根岸雅史(編著)(2020).『教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック』。大修館書店。
- 14) 望月昭彦(編)(2018).『新学習指導要領にもとづく英語科教育法第3版』。大修館書店。